

# 子どもにとって最高なもの それはお母さんの笑顔

**多** 古町内にある佐久間助産院。佐久間早苗さんは、今までの経験を生かし、若い助産師たちと勉強会を開催していました。若手助産師育成にも力を注ぐベテラン助産師の佐久間さんです。

**代** 々続いた医師の家に7女の長女として生まれ育った佐久間さん。家柄から医師を目指す道が決まっていたように思われがちですが、医師だった父親からは「好きな道に進めばいい。ただし、目的を持ち、手に技を付けなさい」と、温かく言われていました。その当時の佐久間さんの夢は大好きだった野菜作りができる「お百姓さん」でした。

**そ** の後は父親の影響もあってか医療の道を目指し、看護学校へ進学。はじめは看護婦（現在の看護師）を目

指していました。助産師を目指すきっかけは、看護学校2年のときの実習で立ち会った出産でした。分娩に苦しみ力んでいたお母さんが見せた、赤ちゃんと初めて顔を合わせたときのニコニコした笑顔。そして、泣いている赤ちゃんがお母さんの肌に触れ、抱っこされるとふっと泣き止んだ姿を目の当たりにしたのです。「これだー」。素晴らしい瞬間に立ち会えたことで、助産師を目指すことを決めました。看護学校3年、助産師学校1年を経て、助産師の資格を取得。都内にある病院の産科で助産師としてのキャリアをスタートさせました。



さくま さなえ  
佐久間 早苗さん [73歳・仲町]  
43年間で4千人以上の赤ちゃんを取り上げた助産師。子育てや妊娠の悩みをはじめ、どんな相談にも乗ってくれる「妊婦のお母さん」。

**し** かし、病院では、外来は外来、分娩は分娩といった配属のため、妊婦一人ひとりとゆっくり向き合うことはできませんでした。「これでは妊婦さんの健康状態など、すべてを分かってあげることができない。体作りや精神的なことまでケアをして、つらいお産から、少しでも苦しみを取り除いてあげたい」という思いが日増しに強くなった佐久間さん。約10年務めた病院を辞め、ふるさとである多古町の助産院を開業したのは30歳の時でした。それから半世紀以上、現役助産師としての活動は続いています。今までに取り上げた赤ちゃんは4千人以上。中には親子2代や、夫婦共に取り上げた方もいます。

**今** つらく思うことは、女性の体が変わってきたことや低体温になってきくなってきたこと。持久力が無くなっている女性が増加していることです。母体が低体温になってしまうと、胎児の体温までが下がってしまうとのこ

と。佐久間さんは、とても心配しています。大切なのは「頭寒足熱！」お腹と足は冷やさないように、女性は出産に向けて、体の準備が必要なのです。うれしいことは「お母さんの笑顔」が見られること。子どもにとってはもちろん、佐久間さんにとってもお母さんの笑顔が一番なんです。佐久間さんは、新しい命を宿したお母さんに、この言葉を問い掛けることから始まります。「どんな子が産みたいの？どんなお産がしたい？」。そして「赤ちゃんを守れるお母さんになってね。そのためには、体をしっかり温めて赤ちゃんに話しかけてあげて。ママの声と笑顔が大好きなんだよ！」

「多古元氣人」では、年齢・性別・分野を問わず、生き生きと元気に活動している人を紹介していきます。これからも「たこげんじん」を発見したいときは、皆さんにご紹介します。



Sanae Sakuma